

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

過敏性腸症候群における不安と生理的反応の関連

The relationship between anxiety and physiological
reaction in irritable bowel syndrome

2010年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科
菅谷 渚
Sugaya, Nagisa

研究指導教員： 野村 忍 教授

過敏性腸症候群 (irritable bowel syndrome : IBS) は、腹痛と便通異常を中心とする症状が慢性再発性に持続する機能性疾患である。IBSの発症と悪化において心理的要因からIBS症状の発生に関わる生理的反応への影響は重要である。IBSを伴う者において強い不安感情あるいは不安障害の高い併存率が認められ、特性的な認知的側面である不安感受性も強いことが示されている。その背景として、腹部症状がストレスorとなつて不安感情を強めるような認知を行うことで不安障害の発症に影響を与えるという原理が考えられる。また、不安感情との関連が報告されている視床下部-下垂体-副腎 (hypothalamic-pituitary-adrenal: HPA)系が腹部症状に影響を与えることが示唆されている。本論文では、不安感情とそれに関わる認知的側面を含む心理的過程を不安と定義し、それがHPA系の指標である副腎皮質ホルモンおよび腹部症状を含む生理的反応にどのように関わるかについて検討することを目的とした。

第1章では、IBSの診断基準・症状・疫学、心理・生理的要因について概説した上で、先行研究から導き出される仮説的モデルを示して本論文の目的を述べた。

第2章では、IBSにおける不安の認知的側面(不安感受性および症状に関する認知)と不安感情の心理的過程を検討した。研究1では、一般の学生におけるIBSを対象に検討した。その結果、不安感受性はIBS症状に関する認知のうちコミットメント、影響性・脅威性の評価と関連し、それらのIBS症状に関する認知は不安感情の強さに関わっていた。一方、生活に支障をきたすレベルの不安感情を反映した指標として回避行動の有無も確認し、回避行動の併存はIBS症状に関する認知および不安感情と関連しており、症状に関する認知が不安感情の重症化において重要であることが確認された。また、不安感受性→症状に関する認知→不安感情のモデルの妥当性の確認したところ、高い適合度が得られた。研究2では、研究1で確認されたモデルが疾患レベルの不安を持つ集団においても同様であるか確認するために、パニック障害患者におけるIBSを対象に検討した。その結果、IBSを伴うパニック障害患者において不安感受性の構成要素である身体症状に対する恐怖の強さと予期不安の強さが認められ、身体症状に対する恐怖はIBS症状に対するコントロール可能性の低下に関わり、そのコントロール可能性の低下はパニック発作の予期に伴う不安感情である予期不安の強さに関連していた。さらに、予期不安の強さを示したIBSにおいて広場恐怖の併存率の高さが認められ、IBSにおける予期不安と広場恐怖の重症度の有意な相関も認められたことから、IBS症状に関する認知によって強められた予期不安は回避行動を伴うような生活支障度の強いレベルに至る可能性が示唆された。研究1および2の結果をまとめると、不安の重症度に関わらず、不安感受性→IBS症状に関する認知→不安感情というモデルが適用できる可能性が示された。また、不安の重症度により、どのようなIBS症状に関する認知が不安感情に関わるかが異なる可能性も示唆された。

第3章では、第2章で扱った不安およびそれに関連する認知が副腎皮質ホルモン (コルチゾールおよびデヒドロエピアンドロステロン[dehydroepiandrosterone: DHEA]あるいは硫酸基結合型 DHEA[DHEA-S]) および腹部症状に与える影響について検討した。まず研究3では、一般の学生を対象に、コルチゾールの反応性の大きさとDHEA-Sの反応性の小ささおよびベースライン値の低さが腹部症状を引き起こしている可能性を示し、同時に本論文において心理的要因とIBS症状を媒介する生理指標として副腎皮質ホルモンを用いる意義を確認した。さらに研究4では、一般の学生におけるIBSを対象に、不安感情が喚起される状況での副腎皮質ホ

ルモンの特徴と、その状況に対する認知と副腎皮質ホルモンの関連を検討した。その結果、IBS を伴う者においてコルチゾールの反応が小さくなっているが、DHEA との比を考慮すると、それによる免疫系などへの影響は顕著でないことが推測された。さらに、不安感情を喚起させる状況に対する脅威やそれに挑むことに対する副腎皮質ホルモンの感受性は高いため、IBS において日常生活上で不安感情が惹起されるような腹部症状が生じる状況など、本人にとって脅威的でどうにか対処しなくてはならない状況に直面した際に、コルチゾールは高く、DHEA(あるいは DHEA-S)は低いというバランスになりやすく、腹部症状を悪化させる可能性が考えられた。

第4章では、以上の4つの研究結果を総合して、不安と生理的反応の関連について論じた。IBS において特性的な不安感受性の強さが IBS 症状に関する認知に影響を与え、その認知が不安感情を強めるという、不安の認知的側面と感情的側面の心理的過程を示し、さらに不安感情を強めるような症状に関する認知の特徴が腹部症状の悪化に関わる生理指標を変化させる可能性を示唆した。